

真田理論から考える 訪問介護の現場的意義

(講演会での学びを踏まえて)

先日、「真田理論の現場的意義を問う」という講演会に参加しました。参加された講師の方々は真田理論が強調する“生活世界へのまなざし”を、現場の実践と結びつけながら丁寧に発表されていました。お話を聞きながら、訪問介護という仕事を持つ意味を改めて考えさせられました。

真田理論では、支援の中心に「その人の生活そのもの」を置きます。講演でも繰り返し語られていたのは、支援者が利用者の生活世界に入り込み、その人が大切にしてきた価値観や習慣を理解することの重要性です。訪問介護はまさにその生活世界の“現場”に直接触れる仕事であり、利用者の家という空間そのものが支援のヒントに満ちています。家の中の物の配置、日々の動線、長年の習慣——それらを丁寧に読み取ることが、真田理論の実践につながると思います。

また、講演では「主体性の尊重」が大きなテーマとして取り上げられていました。真田理論では、人は本来、自分の生活を自らつくり出す力を持つとされています。

訪問介護は、利用者が自分のペースで生活できる環境の中で支援を行うため、その主体性を守りやすい特徴があります。真田理論では「利用者の“できること”を見つけ、それを支えることが介護者の役割である」と語っていました。

たとえば、料理の一部だけでも利用者が関われるように工夫したり、掃除の仕方にその人らしいこだわりがあれば尊重したりすることです。こうした小さな積み重ねが、利用者の自尊心や生活意欲を支えるのだと改めて感じました。

訪問介護は「関係性は支援者と利用者が共に創り上げるもの」と述べていて、真田理論が重視する“相互作用”の視点を紹介していました。利用者が安心して気持ちを話せる関係が築かれることで、生活の中の困りごとや不安が表に出やすくなり、より適切な支援につながります。

また、真田理論の本を読み返し心に残ったのは、「生活の継続性を守ることこそ訪問介護の使命である」という言葉でした。病気や障害によって生活が揺らぎそうなときでも、訪問介護が入ることで“これまでの生活の延長線上で生きられる”という感覚を保つことができます。長年続けてきた趣味を続けられるように支援したり、家族との関係が途切れないように調整したりすることは、真田理論が大切にする「その人らしさ」を守る実践そのものだと感じました。

最後に、訪問介護が地域とのつながりを再構築する役割についても考えさせられました。利用者が地域のサービスや人々と関わり続けられるよう支援することは、孤立を防ぎ、社会参加を促すと思います。「訪問介護者は利用者と地域をつなぐ架け橋である」と語り、その役割の大きさを改めて感じました。

この学びを通して、訪問介護は単なるサービス提供ではなく、利用者の生活そのものを支える創造的な営みであることを再認識しました。真田理論は、その実践に深い意味づけを与えてくれる理論だと強く感じています

管理者 西浦 由香

